

# 子どもものの絵から語る平和

## ミサイル飛ぶウクライナの空、がれきの街…

ロシア軍による侵攻が続くウクライナの子どもたちが描いた絵を鑑賞する催しが19日、千種区桜が丘の愛知淑徳大星が丘キャンパスで開かれた。学生や地域住民約30人が参加し、戦争と平和を語り合った。

(片岡典子)

千種区 愛知淑徳大で催し



ウクライナの子どもたちが描いた絵を鑑賞する参加者たち。千種区桜が丘の愛知淑徳大星が丘キャンパスで

学生と地域住民の月例の交流サロン「淑徳カフェ」の一環。会場にはウクライナの子どもたちとの交流を続けるNPO法人「チェルノブイリ救援・中部」（中区）から借り受けた作品112点を展示。ミサイルが飛ぶ空の下、女の子が花束を持ってひざまずく作品や、がれきになった街を描きつつ「ウクライナの勝利を願っています」とメッセージを添えた作品などがあり、参加者たちが感想や自身の経験を話し合った。

名東区の松波寿子さん(82)は戦時中、千種区の旧陸軍の武器製造所の近くに住んでおり、空襲に遭った。逃げるのときに見た真っ赤な空や、防空壕が満員で入れてもらえなかったことを覚えている。過酷な状況の中でも気丈に振る舞う様子がにじみ出るウクライナの子どもたちの絵を見て「子どもさえも国の勝利を願っていると言わなければならぬ状況に悲しくなった」と顔を曇らせた。

隣にいた同大福祉貢献学部2年の石川佳暖さん(20)は「経験していない私には戦争というものは想像を絶する。具体的な経験を聞く大切さを感じた」と話した。

2024年7月21日（日）中日新聞朝刊17面より  
この記事は中日新聞社の承諾を得て掲載しています。